

高専女子のキャリア形成におけるキャリア教育の影響を探る

○谷口 亜紀子^{a)}

^{a)}津山工業高等専門学校 技術部

1. はじめに

近年技術系教育の現場において、女子学生に対するキャリア教育の再構成が課題となっている。彼女らは卒業後、比較的短期間で専門職での就労継続を断念するケースが多く、これは社会的な損失となっている。津山工業高等専門学校（以下、津山高専）も例外ではない。優秀な成績で高専を卒業し、技術系専門職につきながらも短期間で離職に至る事例は少なくなく、また就職以前の段階において、技術系専門職への就労意欲を十分に獲得できないでいる学生もみられる。こうした高専女子学生・卒業生が技術系専門職を核としたキャリア形成トラックにのりきれない背景にはなにがあるのだろうか。

2. 研究目的

報告者は、このキャリア形成をめぐる問題の核には、ロールモデルの供給のありかたがあるのではないかという仮説の検証を目的として、ライフコースの形成過程とそれに対する主観的な把握のあり方に関する質的研究を実施した。この調査では、女子学生向けキャリア教育を受けていない 35 歳以上の津山高専女性卒業生を対象とした。調査時点で技術系専門職の継続者は半数もおらず、キャリア教育の有無およびその内容とその後のライフコースのあり方の関係性という探究課題が浮上した。

そこで女子学生向けキャリア教育を受けた世代の女性卒業生に対して、在学時に得た見通しや就業後に歩んだキャリア形成過程について面談調査を行い、女子学生向けキャリア教育の影響、その必要性和方法に関する基礎資料を得て、キャリア教育を受けていない世代との比較調査を行うこととした。同時に同じ対象者に対し長期的に調査を継続することも見込んでいる。

3. 調査の方針

これまで筆者が断片的に観察してきた高専女子学生のキャリア形成事例および技術系専門職としてのロールモデル獲得事例をもとに、卒業後 10 年以内の対象者に対してキャリアの見通しや現状を調査した。調査は調査対象者との対話をつうじて実施することで質的な研究アプローチをとるため聞き取りによっておこなった。インタビューによる聞き取り調査を実施するにあたっては、まず具体的な問いを作成し、聞き取り調査においてその問いに対するデータを収集した。すべての調査対象者データが揃った段階で分析を行った。

4. 聞き取り調査

調査は 2020 年度 5 名、2021 年度 10 名、合計 15 名に対して実施した。インタビュー当時の卒業経過年、インタビュー当時の居住地、卒業後の進路は以下の通りである。進学 4 名のうち 3 名は大学院へ進学および進学予定である。

また学生時に受けたキャリア教育について調査したところ、高専女子フォーラムへの参加や卒業生講演の受講、企業訪問などが挙げられた。しかし、3 名はキャリア教育があったことを知らず、受けた記憶がないとの回答をしており、キャリア教育のあり方について再考する必要性がうかがわれた。キャリア教育を受けたと回答した調査対象者は「就職先を選ぶ判断基準が身についた」「自分に向いている仕

事がわかった」など、より明確に自分の将来をイメージできるようになった様子を語った。

表 1 卒業経過年

卒業経過年	人数
1年以内	7
～3年	2
～5年	5
～10年	1

表 2 居住地

居住地	人数
岡山	7
九州	1
関西	4
関東	2

表 3 卒業後の進路

進路	人数
進学	4
就職	11

5. 考察

高専卒業時に就職を選択した調査対象者は、調査時点で全員が初職を継続しており、技術系専門職に就いていることがわかった。その背景にはキャリア教育を受けたことで、自分の将来を現実としてイメージでき、自分なりの優先順位を設けて企業を選択できたことが影響している可能性が考えられる。在学中に受けたかったキャリア教育にはどのようなものがあつたか尋ねたところ、「先輩の声が聴ける場を増やしてほしい」との声が多く、自分の将来をより鮮明にイメージしたいとの気持ちが強いように感じられた。

また調査対象者のうち 11 名は結婚を望んでおり、全員が出産を望んでいた。調査対象者のうち 14 名は母親が働く姿を見て育っているため、結婚後に働くことを普通と考えており結婚=退職ではないと捉えていた。調査時点で結婚および出産を経験しているのは 1 名のみであり、その 1 名も現在育休中であることから、結婚後の就業継続については不明である。しかし、ロールモデルに限って見た場合、予想に反し、母親は彼女らのロールモデルとはなっていないことがわかった。ロールモデルとなっていたのは、バイト先や学校の先輩、父親、大学の教授など、職種や性別・年代に関係なく、各人が個々に尊敬している人物であった。

6. 津山高専での満足度

調査対象者は、津山高専での被教育経験やそのライフコースにおける意義に関し、当事者として高い満足度を示していることがわかった。これは高専の特長、すなわち教職員との距離が近く密な関係が築けること、学生生活の自律度・自由度の高さ、幅広い年齢層が在籍する課外活動での経験などが理由として挙げられた。このことから、津山高専における教育のもつ機能として、制度的に掲げられている技術系専門職養成よりも、カリキュラム外教育を含めた教養教育の影響力が大きいことが推論される。これは高専教育一般に見られる特徴かもしれないが、津山高専に特有という可能性もある。

7. 今後に向けて

こうした聞き取り調査を長期的・継続的に実施し、技術者養成教育の基礎資料として蓄積する必要がある。津山高専に限ってみても、キャリア教育の有無により、学生たちの将来の選択が変化してきている。社会状況の変化にともなって、そこからあらわれてくるキャリア教育上の課題は変化していくと考えられる。

本研究は科学研究費補助金（奨励研究・課題番号：20H00710 及び 21H03901）により実施された。